

“Innocence” の意味の転移

—ヘンリー・ジェイムズ『アメリカ人』の宗教的・歴史的背景—

中村 紘 一
北村 安津 紗

1. 結婚は買い物

The American は「アメリカ人」の男 Christopher Newman の物語で、一代で財をなした彼はビジネスの成功だけでは飽き足らず、自分に相応しい妻を求めてヨーロッパへ渡る。

Newman によれば、自分に相応しい妻とは “a great woman” (44) であり、その妻は次のようであればならないという。

I have succeeded, and now what am I to do with my success? To make it perfect, as I see it, there must be a beautiful woman perched on the pile, like a statue on a monument. She must be as good as she is beautiful, and as clever as she is good. I can give my wife a good deal, so I am not afraid to ask a good deal myself. She shall have everything a woman can desire; ...I want to possess, in a word, the best article in the market. (44) (省略筆者)

Newman はビジネスで成功し富を築くと、今度はその富を使って完璧な女性を手にいれたいと考えている。上記引用中の “a statue on a monument” という表現からも明らかなように、彼にとって、妻は「自分の成功を象徴する飾りもの」であり、さらには、「市場の中で最上の商品」でなければならないのだ。

ここで、結婚市場の中で女性を商品と考える Newman を非難することはできない。それは格別珍しいことではなかったからである。現に、Marquise Bellgarde は娘を良家に嫁がせることで一家の財産を増やそうと目論見、まだ十代だった Claire をその意志を無視してまでも60歳の貴族と結婚させた。Newman はこうした結婚を「フランスによくある恐ろしいやり方」と呼んでいるが、若くて自立心の強い画学生 Mademoiselle Noemi ですらも「結婚は裕福になるためのよいチャンス」と臆面なく言っている。

とはいえ、Newman がパリで再会した旧い友人 Mr. Tristram に次のように打ち明けるときの最上級の形容詞の多用は尋常でない。

I want the biggest kind of entertainment a man can get. People, place, art, nature, everything! I want to see the tallest mountains, and the bluest lakes, and the finest pictures, and the handsomest churches, and the most celebrated men, and the most beautiful women. (35)

繰り返される最上級は彼のアメリカ人らしい野心や貪欲さを表し、この世のすべてに目に見える順番があると勘違いする下品・無教養をさらけ出している。さらに直前でも、Newman は“Didn't I say I wanted the best? I know the best can't be had for mere money, but I rather think money will do a good deal.” (35) と述べているが、一番を手に入れるにはお金だけではどうにもならないことを認めながらも、それでいてお金はたいへん役に立つだろうと確信しているのである。

彼は、Grand Tour に出発するに際しても、世界とは“a bazaar, where one might stroll around and purchase handsome things” (66) であると考えていたという。ここで“have”や“collect”という動詞ではなく、“purchase”という動詞が使用されていることこそ、お金でさまざまなものを手に入れることができるという彼の考えを裏づけている。そして、Newman にとって結婚もまた買い物であり、金で買えないことはないと信じているのである。

こうしたことを踏まえると、Mrs. Tristram が Newman のことを “You are the great Western Barbarian, stepping forth in his innocence and might, gazing awhile at this poor effete Old World, and then swooping down on it.” (42) と述べたことも頷ける。

“Barbarian” という言葉が自分に使われたことに Newman は不服であるが、しかしながら、金さえあれば何でも手に入れることができ、貴族階級の娘との結婚も実現不可能ではないと考えている Newman は無教養な “barbarian” と評されても仕方のないことである。

2. Newman の innocence

ところで、上の引用中で Mrs. Tristram は Newman を表す言葉として “innocence” という言葉を使っているが、Martha Banta は *New Essays on The American* の序文で Newman の innocence について次のように述べている。

the word itself has shifted from a reference to purity to one of knowing; from childlike freshness and charming naiveté to the dangers faced by Americans lacking sufficient awareness (Banta, 27).

ここで “innocence” という言葉の意味が、Banta が言うように「十分な認識を欠いたアメリカ人が直面する危機」にまで転移しているかどうかはまだ定かでないが、それが純粹さ、無邪気さといった良い意味だけでなく、無知や無教養といった悪い意味も含むことは納得できる。特に、彼の innocence が無知として表れているのは、Newman が Valentin に Claire と結婚したいという意志を打ち明けた夜のことであった。

Valentin は Newman が真剣であることに驚き、「率直に言えば、喜んだらいいのかあきれたらいいのかわからないのです」と言う。なぜあきれのかわからない Newman がその理由を尋ねると、Valentin は “Why, you are

not noble, for instance,” と答える。これに対して、Newman は “The devil I am not!” (「僕が noble でないなんてとんでもない!」) と言い張る。そんな Newman に Valentin は “I did not know you had a title?” と少し真面目になって尋ね返す。どうもおかしい二人のやりとりを追っていくと、どうやら Newman が “noble” の意味を取り違えているらしいことに気づく。「貴族」のつもりで言った Valentin に対し、Newman は「高貴」という意味に解釈したのだ。こうした意味の取り違いからも、Newman が貴族というものにほとんど注意を払っていないことが窺える。その証拠に彼は、A count, a duke, a marquis? I don't know anything about that, I don't know who is and who is not. But I say I am noble. I don't exactly know what you mean by it, but it's a fine word and a fine idea; I put in a claim to it. (105) と続けている。このようにフランスの階級制度に疎い Newman の態度は愚かであるとしか言いようがなく、Valentin があきれても無理ない。

The American が『アトランティック・マンスリー』に連載された当時 Newman の実ることのなかった恋の結末に賛否両論があった。例えば、1887年7月号の *The Galaxy* は、

Newman, although an honorable and respectable man, intelligent in his way, and well-behaved enough, is so entirely lacking in attractive personal qualities, and although not exactly uncouth, so raw in his manner, that no one wonders why the Bellegardes, being at heart dishonorable people, seize the first opportunity of getting rid of him” (395).

と述べ、Newman のよい面も認めているとはいえ、全体として Bellegarde 家の人々が彼を厄介払いするのは仕方ないと考える。本質的には “dishonorable” な彼らにとって、Newman はビジネスの世界ではさまざまな経験をし、年齢的にも成熟した男であっても、ある面でまったく無知な男であったのだ。そして、無知がゆえに、Newman が犯した、われわれには同

情できないいくつかのミスに気づく。

3. Newman の政治的無知

Mrs. Tristram は Newman に、自分と Claire とが修道院で仲良くなったことを話しながら、Claire の家族 Bellgarde 家はプライドが高く、Claire を厳しく監督していたために自分たちの仲を諦めてしまわなければなかったことを打ち明ける。そして、さらりと Newman に問う。“Do you know what a Legitimist is, or an Ultramontane? Go into Madame de Cintre’s drawing-room some afternoon, at five o’clock, and you will see the best-preserved specimens. I say go, but no one is admitted who can’t show his fifty quarterings.” (47)。Legitimist (正統主義者) とは、ブルボン王朝の嫡系を強く支持する人々を指し、Ultramontane とは文字通りには「山 (アルプス) の向こうの、イタリアの」の意味で、そこから、教皇権至上主義者、すなわち、ローマ教皇の首位性を主張する立場の人を指すようになった。John Carlos Rowe によれば、Legitimist たちは、ローマにおける教皇の世俗の権力 (Ultramontane の権力) をベースにした国際的な力を築くために尽力した。

従来解釈では、Bellgarde 家が正統主義者であることや教皇権至上主義者であることはややもすると等閑に付されてきた。しかし、Bellgarde 家の所有するさまざまなものが、Bellgarde 家の政治的・宗教的な立場を示す有効な表徴になっていることに注意しなければならない。例えば、フルリエールにある、Claire の父親が埋葬される Bellgarde 家の館はアンリ 4 世の時代のものである (このことを Newman は地方の案内書で知る)。アンリ 4 世は、ブルボン朝初代のフランス国王で、彼のあとブルボン王朝は約 180 年続き、これはアンシャン・レジームと呼ばれている。したがって、フルリエールにある Bellgarde 家の館は Bellgarde 家が正統主義者としてブルボン朝を支持していたことの裏付けとなっているのである。

その後のフランス政治史は以下のように要約される。1789年フランス革命が勃発し、人権宣言が10月に採択されると、ブルボン王朝は終わりを迎え、それまでの王政と封建制度は崩れ去った。だが、フランス革命によって安定した共和主義の政府が作られることはなく、1799年ナポレオン・ボナパルトがフランス政権を掌握するまでは恐怖政治が続いた。ナポレオン・ボナパルトは初代皇帝を名乗り、フランス第一帝政（1804-1814）が始まった。

ワテルローの戦い（1814）でナポレオン1世が敗北したあと、ブルボン朝はフランスの王座に戻ってくる（フランス復古王政）。しかし、アンシャン・レジームの時代からフランスも大きく変わっていたために、憲法の制限を受けての復古であった。ルイ18世が比較的そうした変化に辛抱強かった一方で、シャルル10世はフランスのカトリック教会で権力を主張することによって、完全な君主として統治しようと試みた。だが、シャルル10世のこうした保守的な政治に市民の不満が爆発し、1830年7月革命が勃発した。その結果、より自由主義的で立憲的な王政がルイ・フィリップによって築かれた（7月王政）。ルイ・フィリップは、より自由主義的な、ブルボン家支流のオルレアン家の出身である。この7月王政はフランス第二共和制が宣言される1848年まで続いた。その後、1852年、ルイ＝ナポレオン（ナポレオン1世の甥）がナポレオン3世としてフランス第二帝政（1852-1870）を開始するが、普仏戦争に敗北し、1870年には第三共和制が成立した。このように19世紀を通して、フランスは7つの政府、2つの革命を経験し、アンシャン・レジームとは異なる新たな社会基盤を模索し続けていた。

ここで、Newman がパリにやってきたのは1868年の5月であると Henry James が作品の冒頭で明記していることを思い出さねばならない。つまり、ナポレオン3世の時代なのだ。すると、Valentin が Newman に伝えていたように、正統主義者でブルボン家を支持する Bellgarde 家がボナパルト家を面白く思っていないことにも頷ける。

こうした歴史的・政治的背景を考慮すれば、Bellgarde 家がアンシャン・レ

ジームの支持者で、彼らがパリでも特に古いタイプの貴族であることを想定するのは容易である。また、そのような Bellgarde 家の娘の結婚には大きな困難がつきものだという事も簡単に想像がつく。

Valentin の宗教的・政治的背景

しかし、Claire と Newman の結婚話は思いのほかスムーズに進む。Newman を姉 Claire の求婚者として受け入れたのは、誰よりもまず Valentin であった。John Carlos Rowe は、その理由を Valentin が教皇のために戦った後、親族の超保守主義に幻滅し、共和主義との調和へと傾いた正統主義者の典型だったからではないかと考えている。確かに、Valentin はかつてイタリアへ行き、カステルフィラルドで教皇のために戦ったと Newman に語っている。彼は Bellgarde という名前のために、さまざまな行動の制限を受け、唯一自分に許されたことは教皇のために戦うことだけであったと打ち明ける。

When I was twenty, I looked around me and saw a world with everything ticketed 'Hands off!' and the deuce of it was that the ticket seemed meant only for me. I couldn't go into business, I couldn't make money, because I was a Bellegardes. I couldn't go into politics, because I was a Bellegardes—the Bellegardes don't recognise the Bonapartes. I couldn't go into literature, because I was a dunce. I couldn't marry a rich girl, because no Bellegarde had ever married a *roturière*, and it was not proper that I should begin. We shall have to come to it, yet. Marriageable heiresses, *de notre bord*, are not to be had for nothing; it must be name for name, and fortune for fortune. The only thing I could do was to go and fight for the Pope. That I did, punctiliously, and received an apostolic flesh-wound at Castelfidardo. It did neither the Holy Father nor me any good, that I could see (93).

カステルフィラルドの戦いは、ピエモンテ軍がローマ教皇軍に勝利し、イタリア統一運動に大きく貢献したと言われている。ここで忘れてはならないのは、この時の教皇軍はいくつかのヨーロッパの国々からのボランティアで

形成されており、フランス西部からは多くのフランス貴族が志願したということである。先に述べたように、Bellgarde 家がロワール河の近くのフルリエールという村に館を持っていることは、小説の中で明らかにされている。このフルリエールというのは実際に西フランスにあるポアティエという市のとなりにある村で、Valentin もその地から志願兵として出征し教皇軍に加わって戦ったと考えられる。しかし、教皇軍は敗北し、Valentin は負傷する。その時、正統主義者の彼が教皇に失望した、つまり、教皇権至上主義者としての立場も危うくしたと考えられる。

そうすると、なぜ Valentin はまるで同盟を結ぶかのように Newman を受け入れたのかが理解できる。Valentin は、Newman に握手を求めながら、Newman を好きだからこそ Claire との仲を応援することを伝えるが、それだけが理由でない。彼は同時に “I am in the Opposition. I dislike someone else.” (109) と付け加える。Newman は “the Opposition” を彼の兄に対する反撥として理解するが、この言葉が大文字が始められているのは政治的な意味合いを示唆しているのだ。

Young Madame de Bellegarde の政治的背景

Young Madame de Bellegarde もまた Newman を支持する一人であったが、彼女は夫 Urbain の主義のために自由にどこへでも出かけて行くということができないと告白する。例えば、彼女はテュイルリー宮殿へ行くことができないが、夫がそれは “dreadfully vulgar” (201) な場所として嫌悪していたからである。夫がなぜ嫌悪するのかを彼女ははっきりと述べていないが、歴史的にナポレオン 3 世の時代には、テュイルリー宮殿は、ナポレオン 3 世と役人の公的施設として使われていたこと、さらにフランス第二帝政を誇示するために豪華絢爛に装飾を施されていたという史実を知れば、正統主義者の Urbain が嫌悪する理由がわかるはずである。

また、Young Madame de Bellgarde は、Urbain が宮中の女性がよく出か

けるところだからという理由でパレ・ロワイヤルにすらも連れていってくれないと嘆く。頑なに自分の主義を通す Urbain に対して、Young Madame de Bellgarde ははっきりと "I prefer clever Bonapartes to stupid Bourbons." (202) と述べているように、夫ほど徹底的な正統主義者ではない。そのうえ、彼女は Newman に "the same camp" (144) に属しているのだから一緒に Bellgarde 家に復讐しようと言ったまですべてのける。しかし、Newman はフランスの政治状況にまったく疎くて、彼女の意図を理解することはできない。

このように Valentin と Young Madame de Bellgarde は、彼らの政治的・宗教的な事情から、Newman を支持する側についたとも解釈できる。彼らは Newman に Bellgarde 家の政治的・宗教的立場についてこれほどまでに多くの情報を与えてくれている。にもかかわらず、Newman がまったくそれらのことについて無知でありつづけたことは、彼のもっとも重大な欠点であった。

Newman が犯すミス

Valentin たちのサポートもあり一度は Bellgarde 家に婚約者として受け入れられた Newman はヨーロッパの政治についてもまったく疎かった。それでも周囲で行われていることについて大体の概念を得たく思い、Urbain に何度か政治の話題を持ちかける。そうしたことに好奇心を抱くことは Bellgarde 家を理解する上で有効な手段であり、Newman の勘のよさには脱帽する。が、何度目かの質問の際に Urbain の信念が、つまり、ブルボン家のアンリ 5 世にフランス王位に即く神聖な権利があると信じていることが語られるとあっさりと政治の話をするのをあきらめてしまう。Newman にとって、Urbain の政治的信念は、喩えれば、魚の骨や胡桃の殻に食欲を抱く風変わりな嗜好なようなもので、それ以上には関心を抱くものではなかったということである。

このようにまったくフランスの政治に無知で、Bellgarde 家の立場につい

でもいっこうに学ぼうとしない Newman はその後さらに重大なミスを犯す。

Newman は Claire に婚約を受け入れられると、あろうことかナポレオン 3 世と関わりの深いオスマン通りにある自分の住居に Marquise Bellgarde を招待しようとする。事前に Urbain がテュイルリー宮殿やパレ・ロワイヤルを嫌悪しているという事実を知らされていたにもかかわらず、政治史の知識を欠いていてその理由を理解できていなかったために、そのようなミスを犯してしまったのである。信仰心の篤い正統主義者の Marquise Bellgarde が申し出を断り、代わりに Bellgarde 家で舞踏会を開くことを提案したことも彼女の政治的信念を考えれば当然のことである。それゆえ、その提案は母がとっさに思いついた口実であり、気づかないうちに Newman は母を窮地に追い込んでいたのだという Valentin の説明には頷ける。

Bellgarde 家で開かれた舞踏会では、そこに集う人々の装いによって改めて Belgarde 家の政治的な状況が知らされる。加えて、“Madame de Bellegarde’s door was inexorably closed against the myrmidons of the upstart power which then ruled the fortunes of France.” (188) と語られている。政治史を考慮すれば、ここでいう “the upstart power” とはもちろんナポレオン 3 世のことを指すのである。

そんな状況で、自分のミスにも気づかず無邪気に舞踏会を満喫する Newman に対して、Young Madame de Bellgarde は皮肉たっぷりに言う。“When I saw you at my mother-in-law’s ball, taking it all so easily, I felt as if you were dancing on your grave.” (278)

4. Newman の終わりなき無知

Newman の無知を考えれば、この舞踏会のあとすぐ、突然 Marquise Bellgarde によって Claire との婚約を破棄されるのも納得される。当時の読者たちはこの破局にとっても残念がったが、Newman がいつまでの自分の無

知に気づけなかったことこそがもっとも残念なことであると言える。

その証拠に突然の破談を告げられた Newman はその理由をまったく理解できなかったのである。Claire は Newman と結婚するには Ballgarde 家の政治的状況に精通しすぎていた。反対に、Newman は自分を愛してくれているにもかかわらず彼女が婚約破棄に同意する理由を理解するには、Ballgarde 家について何もかも無知でありすぎた。フルリエールでの長い話し合いの末、Claire は婚約を破棄した理由を “It’s like a religion” (242) と涙ながらに Newman に伝える。その後も何度も “religion” という言葉を口にするのであるが、ここでいう “religion” は単にカトリックやプロテスタントということだけでなく、Bellgarde 家は正統主義者であり、また教皇権至上主義者で、しかも、これまで見てきたように Urbain と Marquise Bellgarde はプライドも高く、まるで信仰のようにその立場を貫くことを意味しているのである。無頓着な Newman にはその意味が理解できるわけはなかった。

Claire は修道院に入ると言い出す。Bellgarde 家の複雑な状況に精通しすぎた彼女には C. S. Lewis が *The Four Loves* でいう “eros” 「異性愛」ではなく “charity” 「神への愛」を選ぶ他に道は残されていなかった。この Claire の決断には Newman はもちろん、Marquise Bellgarde も驚くが、しぶしぶ承諾する。Valentin の決闘の理由をでっちあげるほどに世間体を気にする Bellgarde 家にとって、娘がアメリカ民主主義者の男と結婚するよりも、修道院へ入る方がまだよかったのだ。

Newman と Claire の婚約が破談になったあと、作品の主題は恋愛から復讐に転じるかに見える。Newman は婚約破棄を仕向けた Marquise Bellgarde と Urbain に復讐することによって、Claire をまた自分の腕の中に取り戻すことができると考えた。それゆえ、Mrs. Bread から Marquise Bellgarde が殺人犯であることをほのめかす証拠を手に入れると、Newman はその秘密を暴露するために Madame d’Outreville を訪れる。しかし、Madame d’Outreville が Madame de Bellgarde の大事な友人であることを Newman は舞踏会のと

きに知らされていた。彼がしっかりと Bellgarde 家の政治的立場を理解していたならば、Madame d'Outreville もまた信仰心の篤い正統主義者であったことは容易に想像できたはずである。

彼女は Newman を快く迎えるが、しかし、Newman がいうところの「上品な会話という壁」、すなわち、その中に入る門はとても見つけられないという壁を築きあげてしまう。興味深いことに、その会話の壁の内容はすべて政治のゴシップであった。彼女はあの偉大なナポレオンを一本参らせたという母親の警句の話をし、続いて部屋に入ってきたイタリアの公爵とイタリアの政治について語り合った。この会話がなされる間、Newman は首をかしげ、沈黙を守る他なかった。彼はヨーロッパの政治史に精通していなかったので、いつの間にか会話の壁の外においやられていたのである。

この壁のイメージは作品の他の箇所でも効果的に使われている。

まず、そのイメージは Newman がフォーブール・サン・ジェルマン通りにある Bellgarde 家を初めて訪れる場面で現れる。その通りは、Newman にとって、東洋の回教国の宮殿の窓一つない壁を思わせ、内部に秘めている多くの秘密を暗示するだけの無感動な面を世間に見せている家々に囲まれているかのようにだった。Leon Edel は論文“A Portrait Rich in National Ambiguities”で、Henry James がただ見て通り過ぎるにすぎなかったフォーブール・サン・ジェルマン通りについての Balzac の文章を読んでいたことに言及している。James もその白く高い壁の前で孤独を感じていたのではないかと思われる。Edel は James の苦い回顧は Christopher Newman に影響を与えているのではないかと示唆している。しかし、作者 James と Newman には決定的な違いがある。James は子供の頃からヨーロッパに滞在し、加えて、その後多くのフランス小説を読んだ結果、ヨーロッパの文化、慣習、歴史に精通していた。Newman はフォーブールの古い建物のなかの貴族の娘と結婚できると信じきっているほど無知であった。

次に、高い壁が現れるのは、Claire が修道女として住むカルメル会の修道

院の背の高い盲壁を Newman が見たときであった。まるで全体が唾で耳が遠く、生命を失っているかのような建物を見、その壁の前に長い間たたずみながら、Newman はここが自分の旅の目的地であった思いがしてくる。それは旧世界を代表する Bellgarde 家を覆う壁と同じで、薄暗く、生氣のない壁で、その前で、Newman は自分のゴールがこうした壁の前にあったことによく気づく。

Newman は一度は Bellgarde 家の壁を通り抜けたものの、結局また壁の外へ追いやられてしまったのである。彼はカルメル会の修道院を後にし、Mrs. Tristram のもとへ向かう。彼女との会話のあと、彼は突然 Marquise Bellgarde の殺人を証明する紙切れを暖炉へ投げ入れてしまう。その後、Newman はどのようにしてその紙切れを手に入れ、それを使って Bellgarde 家にどのような復讐を計画していたかを説明するが、それを聞いていた Mrs. Tristram は次のように述べる。

I suppose there is no harm in saying that you probably did not make them [the Bellegardes] so very uncomfortable. My impression would be that since, as you say, they defied you, it was because they believed that, after all, you would never really come to the point. Their confidence, after counsel taken of each other, was not in their innocence, nor in their talent for bluffing things off; it was in your remarkable good nature! You see they were right.
(309)

彼女のいう“your remarkable good nature”はこれまでしばしば Bellgarde 家への復讐を諦めた Newman への賛辞と解釈されてきた。しかし、すでに見てきたように Newman の終わりなき無知を考慮すれば、Newman への苦い皮肉と見なさざるを得ない。Newman の恋物語の見物人であった Mrs. Tristram は彼の終わりなき無知を“good nature”と呼ぶ他なかったに違いない。しかし、Newman はいまだに自分の欠点に、したがって、彼女の皮肉にも気づかないままである。そのままアメリカへと戻り、彼が二度とパリへ

戻ってくることはない。

このようにして、歴史的な観点からこの作品を見てみると、これまで Newman の good nature と信じられてきた“innocence”の意味は、Martha Banta や John Carlos Rowe が示唆するように、彼の致命的な欠点である“ignorance”のそれへと転移していることが検証されるのである。

参考文献

- Banta, Martha. “Introduction,” *New Essays on The American*. Cambridge UP, 1987
- Edel, Leon. “*The American*,” *Henry James: The Conquest of London, 1870–1881*. Philadelphia: J. B. Lippincott Company, 1962
- Howe, Irving. “Henry James and the Millionaire,” *Tomorrow* 9. (1950) *The American*. ed. James W. Tuttleton. New York: Norton, 1978
- James, Henry. *The American*. ed. James W. Tuttleton, New York: Norton, 1978
- . “Preface” to the New York Edition. (1907) *The American*. ed. James W. Tuttleton, New York: Norton, 1978
- Lewis, C. S. *The Four Loves*, ed. Haruhiko Fujii, Kyoto: Apollon-sha, 1969
- McCormack, Peggy. “The Consequences of Gender: *The Portrait of a Lady and The American*,” *The Rule of Money: Gender, Class, and Exchange Economics in the Fiction of Henry James*. Ann Arbor: UMI Research Press, 1990
- Poirier, Richard. “The Comedy of Fixed and Free Characters,” *The Comic Sense of Henry James: A Study of the Early Novels*. New York: Oxford US, 1960.
- Rowe, Carlos, John. “The Political Innocence in Henry James’s *The American*,” *New Essays on The American*. ed. Martha Banta, Cambridge UP, 1987
- “Culture and Progress: ‘*The American*,’” *Scriber’s* 14. (1877) *The American*. ed. James W. Tuttleton. New York: Norton, 1978
- “Current Literature,” *The Galaxy* 24. (1877) *The American*. ed. James W. Tuttleton. New York: Norton, 1978
- en.wikipedia.org/wiki/France (accessed Jun 19, 2009)
- en.wikipedia.org/wiki/Legitimist (accessed Jun 19, 2009)
- en.wikipedia.org/wiki/Tuileries_Palace (accessed Jun 19, 2009)